

令和7年度病虫害発生予察情報 発生予報第8号(8月)

令和7年8月29日

発表：福島県病虫害防除所

【注意が必要な病虫害】

普通作物	■ 大豆：吸実性カメムシ類 -②
果樹	■ 果樹共通：果樹カメムシ類 (令和7年7月10日付け注意報参考) -① ■ リンゴ・モモ・ナシ：ハダニ類 (令和7年8月1日付け防除情報参考) -① ■ リンゴ：リンゴ褐斑病 (令和7年6月30日付け防除情報参考) -② ■ モモ：モモハモグリガ -② ■ モモ・ナシ：ナシヒメシンクイ -②
野菜花き	■ 夏秋トマト：トマト黄化葉巻病 (TYLCV)、トマトキバガ、トマトサビダニ -③ ■ 野菜花き共通： ハスモンヨトウ (令和7年8月28日付け注意報参考) ハダニ類 (令和7年8月6日付け防除情報参考) -① ■ スイカ：スイカ黒点根腐病 (令和7年8月28日付け特殊報第1号参考) -③ ■ トルコギキョウ：トルコギキョウ葉巻病 (令和7年7月22日付け防除情報参考) -③

※ 上記の表に記載された病虫害は、下記の①～③に該当します。

注) ①現状において、注意報レベルの防除を要すると判断された病虫害

②「1 主な病虫害の発生予報」のうち、予察調査の結果、発生時期が「やや早い」、発生量が「やや多い」と予測された病虫害の中で特に懸念される病虫害

③「1 主な病虫害の発生予報」以外で、調査の結果、県全域的に発生が多く、問題になると判断した病虫害

1 主な病虫害の発生予報

(1) 普通作物

作物名	病虫害名	地方	発生時期	発生量	予報の根拠	防除上注意すべき事項
大豆	紫斑病	全域	—	平年並	天候予報(仙台管区气象台8月28日発表)によると、降水量は平年並と予想されている(±)。	開花後20～40日頃に薬剤を1～2回散布する。その際、薬剤が莢に十分付着するようにする。 適期収穫及び速やかな乾燥調製を心がける。
	べと病	全域	—	平年並	8月の巡回調査での発生は場割合は、平年並であった(±)。	発生が多く見られる場合は、薬剤散布を行う。 防除時期や対策については、令和7年8月5日付け防除対策を参照する。

大 豆	吸実性 カメムシ 類	全 域	—	やや多い	8月の払落し成虫数は、例年並であった（±）。 天候予報によると、向こう1か月の気温は高いと予想されている（+）。	発生がみられる場合は、 着莢期（8月中下旬）～子 実肥大期（9月上～下旬） に薬剤散布を実施する。
	フタスジ ヒメハム シ	全 域	—	例年並	8月の払落し成虫数は、例年並であった（±）。	発生がみられる場合は、 子実肥大期に薬剤散布を 実施する。
	チョウ目 幼虫	全 域	—	例年並	8月の払落し幼虫数は、例年並であった（±）。	幼虫の虫齢が進むと加 害量が急激に増加するた め、食害が見られたら速や かに薬剤散布を実施する。

注）予報の根拠の中で（+）は多発要因、（-）は少発要因、（±）は平年並要因であることを示す。

（２）果樹

作物名	病害虫名	地方	発生 時期	発生量	予報の根拠	防除上注意すべき事項
リンゴ	斑点落葉 病	全域	—	平年並	新梢葉での発生は場割合は平年並であった（±）。	天候に注意しながら、散布間隔があきすぎないように薬剤散布を実施する。
	褐斑病	県北 県中・ 県南 会津	— — —	平年並 やや多い 平年並	県北・会津地方では7月下旬の新梢葉での発生は場割合は平年並であった（±）。県中・県南地方では、新梢葉での発生は場割合は平年よりやや高かった（+）。発病葉率は全域で平年並であった（±）。	現在、本病の二次感染期であるので、感染拡大を抑制するため天候に注意しながら、散布間隔があきすぎないように薬剤散布を実施する（令和7年6月30日付け令和7年度病害虫防除情報（リンゴ褐斑病）参照）。
	炭疽病	全域	—	平年並	果実での発生は場割合は平年並であった（±）。	降雨が多い場合は9月上旬以降も防除を行う。
	キンモン ホソガ	中通り 会津	— —	やや多い 平年並	新梢葉での発生は場割合は、中通りでは平年よりやや高く（+）、会津では平年並であった（±）。	本種の発生が多い場合は、防除を行う。
	シンクイ ムシ類	全域	—	平年並	ナシヒメシンクイ・モモシンクイガの果実被害の発生は場割合は平年並であった（±）。スモモヒメシンクイの果実被害の発生は場割合は県北・会津地方は平年並（±）、県中・県南地方は平年よりやや高かった（+）。	シンクイムシ類の発生が多い場合は、防除を行う。被害果は園内に放置せず適切に処分する。
	ハマキム シ類	全域	—	平年並	果実被害の発生は場割合は平年並であった（±）。	

リンゴ	ハダニ類	全域	—	多い	新梢葉寄生の発生ほ場割合は平年より高く（＋）、葉焼け症状が多数のほ場で確認され、落葉したほ場も確認された。東北地方の1か月予報（令和7年8月28日発表）によれば、向こう1か月の平均気温は高いと予想されている（＋）。	園内の発生状況を確認し、要防除水準（1葉当たり雌成虫1頭以上）に達した場合は、薬剤散布を実施する（令和7年8月1日付け令和7年度病害虫防除情報（ハダニ類）参照）。
モモ	せん孔細菌病	中通り	—	やや少ない	新梢葉、果実での発生ほ場割合は平年よりやや低かった（－）。	秋雨や台風の襲来が予想される時期なので、天候に注意しながら秋期防除を必ず実施する。
	モモハモグリガ	中通り	—	やや多い	新梢葉の発生ほ場割合は平年よりやや高かった（＋）。	今後の気温が2℃高く推移した場合、本種の第6世代の防除適期は9月1半旬頃と推定されており（果樹研究所、8月26日現在）、発生が多いほ場では、収穫後でも防除を徹底する。
	ナシヒメシンクイ	福島地域 伊達地域	— —	平年並 やや多い	8月上旬の新梢葉被害の発生ほ場割合は、福島地域は平年並であり（±）、伊達地域では平年よりやや高く、中発生ほ場が確認された（＋）。	今後の気温が2℃高く推移した場合、本種の第5世代幼虫の防除適期は9月1半旬頃と推定されており（果樹研究所、8月26日現在）、本予測を参考に晩生種での防除を徹底する。
	ハダニ類	中通り	—	多い	新梢葉寄生の発生ほ場割合は平年よりやや高かった（＋）。東北地方の1か月予報（令和7年8月28日発表）によれば、向こう1か月の平均気温は高いと予想されている（＋）。	園内の発生状況を確認し、要防除水準（1葉当たり雌成虫1頭以上）に達した場合は、薬剤散布を実施する（令和7年8月1日付け令和7年度病害虫防除情報（ハダニ類）参照）。
ナシ	黒星病	全域	—	平年並	新梢葉での発生ほ場割合は平年並であった（±）。	発病部位は見つけしだい除去し、園外に持ち出すなど適切に処分する。本病の発生状況に応じて「幸水」収穫後の防除を実施する。

ナ シ	ナシヒメ シンクイ	県北 県中 ・県南 浜通り	— — —	平年並 平年並 やや多い	県北・県中・県南地方における 果実被害の発生ほ場割合は、平年 並であり（±）、浜通り地方では 平年よりやや高かった（+）。	ナシの果実被害や近隣 のモモやウメ等の核果類 の芯折れの発生状況に注 意し、防除を徹底する（発 生が懸念される病害虫の 欄参照）。
	ハマキム シ類	全域	—	平年並	果実被害の発生ほ場割合は平 年並であった（±）。	
	ハダニ類	全域	—	多い	新梢葉寄生の発生ほ場割合は 平年より高く、葉焼け症状が多数 のほ場で確認され、落葉が確認さ れたほ場も確認された（+）。東 北地方の1か月予報（令和7年8 月28日発表）によれば、向こう 1か月の平均気温は高いと予想 されている（+）。	園内の発生状況を確認 し、要防除水準（1葉当 たり雌成虫1頭以上）に達し た場合は、薬剤散布を実施 する（令和7年8月1日付 け令和7年度病害虫防除 情報（ハダニ類）参照）。
果樹 共通	カメムシ 類	県北・会 津・浜通 り北部 県中・県 南・浜通 り南部	— —	多い やや多い	7月5半旬～8月4半旬のフェ ロモントラップにおける誘殺数 は、県北・会津・浜通り北部で平 年より多く（+）、県中・県南・ 浜通り南部では平年並であった （±）。東北地方の1か月予報（令 和7年8月28日発表）によれば、 向こう1か月の平均気温は高い と予想されている（+）。	第一世代成虫の園地へ の飛来状況をよく確認し、 多数の飛来が確認された 場合、薬剤散布を実施する （令和7年7月10日付け 令和7年度病害虫発生予 察情報注意報第1号参 照）。

注）予報の根拠の中で（+）は多発要因、（-）は少発要因、（±）は平年並要因であることを示す。

（3）野菜、花き

作物名	病害虫名	地方	発生 時期	発生量	予報の根拠	防除上注意すべき事項
夏 秋 ト マト(被 覆栽培)	灰色かび 病	全 域	—	平年並	発生ほ場割合は、平年並であっ た（±）。	発病葉は摘除し、防除を 徹底する。 多湿条件で発生が多 くなるので換気を十分に行 う。
	葉かび病	全 域	—	平年並	発生ほ場割合は、平年並であっ た（±）。	多湿条件で発生が多 くなるので換気を十分に行 う。
	すすかび 病	全 域	—	平年並	発生ほ場割合は、平年並であっ た（±）。	多湿条件で発生が多 くなるので換気を十分に行 う。
	アブラム シ類	全 域	—	平年並	発生ほ場割合は、平年並であっ た（±）。	ほ場をよく観察し、発生 が多い場合は、速やかに防 除を実施する。

夏 秋 トマト(被覆栽培)	コナジラミ類	全 域	—	平年並	発生ほ場割合は、平年並であった(±)。	ほ場をよく観察し、発生が見られる場合は、速やかに防除を実施する。 一部のは場で寄生葉率の高いほ場が確認されており、トマト黄化葉巻病の発生も確認されている。薬剤による防除を徹底し、葉裏まで薬剤がしっかりとかかるように防除する。
夏 秋 キュウリ(露地栽培)	べと病	全 域	—	平年並	発生ほ場割合は、平年並であった(±)。	多湿条件が続くと発病しやすくなるので、発生初期から防除を実施する。
	うどんこ病	全 域	—	平年並	発生ほ場割合は、平年並であった(±)。	まん延すると防除が困難となるので、発生初期から防除を実施する。
	炭疽病	全 域	—	平年並	発生ほ場割合は、平年並であった(±)。	発病葉は摘除し、発生初期から防除を実施する。 排水対策の徹底、過湿防止、資材の消毒に努める。
	褐斑病	全 域	—	やや少ない	発生ほ場割合は、平年よりやや低かった(—)。	発病葉は摘除し、発生初期から防除を実施する。 被害茎葉残さは、必ずほ場外に持ち出して処分する。また、資材の消毒に努める。 なお、耐病性のない品種を定植しているほ場では、特に注意し、防除を徹底する。
	つる枯病	全 域	—	平年並	発生ほ場割合は、平年並であった(±)。	発病葉や発病枝は摘除し、発生初期から防除を実施する。 ほ場をよく観察し、発生が多い場合は、速やかに防除を実施する。
	アブラムシ類	全 域	—	やや多い	発生ほ場割合は、平年よりやや高く(+)、アブラムシ類が媒介するモザイク病(CMV等)の発生も平年よりやや高い。	ほ場をよく観察し、発生が多い場合は、すみやかに防除を実施する。
	ハダニ類	全 域	—	やや多い	発生ほ場割合は、平年並であった(±)。また、天候予報(仙台管区气象台8月28日発表)によると、向こう1か月の期間の前半は、気温がかなり高くなると予想されている(+)	ほ場をよく観察し、低密度時から防除を実施する。 薬剤抵抗性の発達が懸念されるため、異なる系統のローテーション散布を実施する。

キク(露地栽培)	白さび病	全 域	—	やや少ない	発生ほ場割合は、平年よりやや低かった(—)。	多湿条件が続くと発病しやすくなるので、予防散布に努める。 品種により発病に差があるので、発病しやすい品種では防除を徹底する。
	アブラムシ類	全 域	—	平年並	発生ほ場割合は、平年並であった(±)。	ほ場をよく観察し、発生が多い場合は、速やかに防除を実施する。
	ハダニ類	全 域	—	多い	発生ほ場割合は、平年よりやや高かった(+)。また、天候予報によると、向こう1か月の期間の前半は、気温がかなり高くなると予想されている(+)。	高温乾燥条件で急激に、発生量が増えるため、ほ場をよく観察し、低密度時から防除を実施する。 抵抗性の発達が懸念されるため、防除薬剤の選択に注意する。
リンドウ	葉枯病	全 域	—	やや多い	発生ほ場割合は、平年よりやや高かった(+)。一部ほ場では、中位葉以上での発生が確認されている。	多湿条件で発生が多くなるので、予防散布に努める。
	褐斑病	全 域	—	平年並	発生ほ場割合は、平年並であった(±)。	病徴を確認してからの薬剤防除では効果が期待出来ないため、発病前からの予防散布に努める。
	黒斑病	全 域	—	平年並	発生ほ場割合は、平年並であった(±)。	降雨が続くと発病しやすくなるため、予防散布に努める。
	ハダニ類	全 域	—	やや多い	発生ほ場割合は、平年並であった(±)。また、天候予報によると、向こう1か月の期間の前半は、気温がかなり高くなると予想されている(+)。	高温乾燥条件で、急激に発生量が増えるため、ほ場をよく観察し、低密度時から防除を実施する。
野菜、花き共通	オオタバコガ	全 域	—	平年並	発生ほ場割合は、平年並であった(±)。	キクでは生長点付近、ピーマンやトマト等では果実等をよく観察し、寄生や被害が見られた場合は、速やかに防除を行う。

注) 予報の根拠の中で(+)は多発要因、(—)は少発要因、(±)は平年並要因であることを示す。

2 発生が懸念される病害虫

ナ シ	■ ナシヒメシンクイ 今後の気温が2℃高く推移した場合、本種の第5世代幼虫の防除適期は9月1半旬頃と推定されています（果樹研究所、8月26日現在）。近隣のモモやウメ等の芯折れの発生状況に注意し、県農作物病害虫防除指針や地域の防除暦を参考に防除を徹底しましょう。なお、昨年度、ナシヒメシンクイに対する防除効果が高く残効の長い殺虫剤が明らかにしましたので、本情報も参考にしましょう。 （令和6年度農業総合センター参考となる成果： http://www.pref.fukushima.lg.jp/uploaded/attachment/680224.pdf） また、本種第5世代幼虫は、9月下旬頃まで発生することがあるので（令和3年度農業総合センター参考となる成果 http://www.pref.fukushima.lg.jp/uploaded/attachment/504234.pdf）、「あきづき」や晩生種に対しては、9月中下旬にも防除を実施しましょう。
モ モ	■ モモせん孔細菌病 8月中旬の新梢葉での発生は場割合は平年よりやや少ない状況ですが、9月は台風の発生が多い時期にあり、今後の天候しだいでは、新梢葉での発生が増加するおそれがあります。本病は秋期に降水量が多いと翌春に春型枝病斑の発生が多くなる傾向にあるため、収穫が終了した園では降雨前の秋期防除を徹底し、越冬病原菌密度の低下を図りましょう。
果樹 共通	■ 果実吸蛾類 果実が成熟し始めると、果実吸蛾類の成虫が夜間に果樹園に飛来し、果実を吸汁加害することがあります。8月中下旬の調査において、ナシ・リンゴでの果実被害が確認されています。果実吸蛾類は山林原野に生息しているため、そういった場所に近い園地では注意が必要です。対策として、多目的防災網等の物理的防除、糖蜜（砂糖200g、酒200cc、酢200cc、水1400ccを混ぜ合わせたもの）を誘引源とした食餌トラップが有効です。 ■ ハスモンヨトウ 病害虫防除所の野菜調査ほ場に設置したフェロモントラップの誘殺数が増加しています（令和7年8月28日付け注意報参照）。近年、果樹においてもリンゴやモモ、ナシ等での葉や果実の食害が確認されています。今後発生が多くなることが懸念されるので、ほ場をよく確認して若齢幼虫期に捕殺してください。 ■ チュウゴクアミガサハゴロモ 県内での発生は未だ確認されていませんが、令和7年7月7日、栃木県北東部のぶどう（露地栽培）ほ場において、本種の成虫・幼虫及び枝への産卵が確認されました。また、同年7月25日、栃木県南部のなしほ場においても、成虫及び枝への産卵が確認されています。本種は中国原産であり、農作物への加害については、令和6年に神奈川県、埼玉県、福岡県及び山梨県から、令和7年に東京都、群馬県、熊本県、富山県、千葉県、大阪府及び奈良県から特殊報が発出されており、本県においても今後、発生が懸念される害虫です。詳細は栃木県の特殊報（令和7年8月15日発表、以下URL）をご参考ください。 https://www.pref.tochigi.lg.jp/g59/boujo/documents/r7tokusyuhou1.pdf
トマト	■ トマト黄化葉巻病（TYLCV） 夏秋トマト、ミニトマトで、トマト黄化葉巻病の発生及び発生地域の拡大が確認されています。発生ほ場においては、コナジラミ類の防除を徹底してください。また、発病が疑われる株については速やかに抜き取り処理を行ってください。なお、今後定植するほ場では、コナジラミ類の侵入を防止するため、ハウス開口部に防虫ネット（0.4mm目合い）を設置しましょう。 病害虫防除所ホームページでも情報を掲載しているため、下記のURLも参考にしてください。 【注意喚起～トマト黄化葉巻病（TYLCV）のまん延防止対策～】 https://www.pref.fukushima.lg.jp/uploaded/attachment/544337.pdf 【トマト黄化葉巻病（TYLCV）対策 チラシ】 https://www.pref.fukushima.lg.jp/uploaded/attachment/648953.pdf 【トマト黄化葉巻病（TYLCV）対策 パンフレット】 https://www.pref.fukushima.lg.jp/uploaded/attachment/648954.pdf

トマト	■ トマトキバガ 南会津地域のフェロモントラップでは、8月3半旬から誘殺数が増加傾向となっています。葉や果実の被害痕をよく観察し、今後の発生に注意してください。 ■ トマトサビダニ 県内複数地域において、発生を確認しています。トマトサビダニは非常に小さい害虫で、被害が大きくなるまで発生に気づかないことがあります。<u>発生が見られたら、すぐに薬剤による防除を徹底しましょう。</u> 被害は、葉が黄化、褐変し、症状は徐々に上部へ広がります。被害が進むと初期の加害葉は枯れあがり、茎も褐変します。多発すると果実も加害され、褐変し、肥大しなくなってしまうです。 今後の高温乾燥条件でさらに被害が拡大する可能性があるため、注意が必要です。
野菜、花き共通	■ ハスモンヨトウ フェロモントラップでの誘殺数は、8月3半旬以降から浜通り及び中通り地方において誘殺数が急増しています。平年の誘殺ピークは9～10月に見られることから、今後も発生量が増加し、被害が拡大するおそれがあるため注意が必要です。
トルコギキョウ	■ トルコギキョウ葉巻病 (TYLCV) 浜通り地域において、7月上旬にタバココナジラミの寄生及びトルコギキョウ葉巻病の発生を確認しています。また、8月上旬以降、中通り地域の複数地点でも発生を確認しています。 本病は、タバココナジラミによって引き起こされます。ほ場をよく観察し、コナジラミ類の発生が見られたら薬剤防除を行いましょう。また、感染した株は伝染源となるため、見つけ次第抜き取って適切に処分しましょう。